

日銀神戸  
支店長の  
視点

別所昌樹氏



100年ほど前に日銀神戸支店ができた時、日本最大の貿易港だった神戸は外国為替取引でも中心地でした。日銀神戸支店は当時、外国銀行6行の神戸支店と取引していましたが、東京の日銀本店は2行だけでした。外国送金を銀行にお願いすると、その銀行は受取人や金額などを示すメッセージとお金を受取人の銀行に渡します。送金をお願いした銀行が受取人の銀行と取引がない場合、それぞれと取引がある別の銀行が間に入りバケツリレーのようにメッセージとお金を渡します。お金は現金を送るのではなく、銀行が中央銀行などに持っている預金口座の帳簿残高が書き換えられることで移動します。メッセージを渡す方法は郵便からデータ通信に進化し、帳簿

### 外国送金、現在と未来

は紙から電子データに変わりましたが、基本的な仕組みは100年前も同じです。この方法は世界中への送金を可能にしますが、複数の銀行が関わることで時間や費用がかかりがちです。近年、資金洗浄・テロ資金対策の要請が高まったことも仕組みを複雑にしています。

一方、企業・市民の活動がグローバル化する中、より早く、安く、安全な外国送金が求められています。昨年、日銀を含む主要国の中央銀行と民間銀行は「分散型台帳」を使った外国送金インフラの可能性を検討する「プロジェクト・アゴラ」という実験を始めました。

分散型台帳はビットコインなどの暗号資産で知られていますが、特定の主体に頼らず、確実にデータを書き換えたり、同じ内容のデータを複数の主体が持つことでリアルタイムの情報共有ができたりする長所があります。こうした特性は、昔からの外国送金の仕組みを生かしながらスピードを高め、コストを抑える可能性も秘めています。